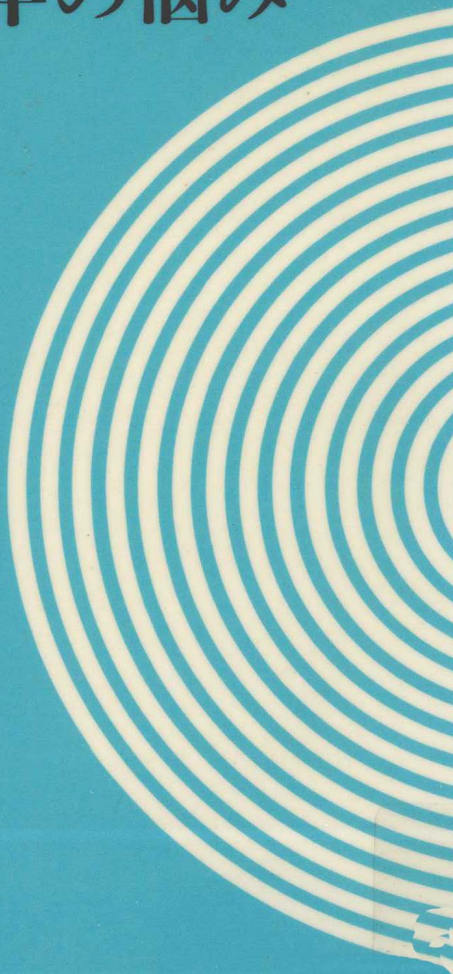


現代青年の悩み

依田 新編

津留 宏・西平直喜著



心理学入門講座

* 新版 5

理学入門
* 新版

5

現代青年の悩み

依田
津留

新編
宏・

西平直喜著

つ　　も　　ひろし
津　　留　　宏

1915年 東京に生まる

1941年 東京文理科大学心理学科卒業

現 在 神戸大学教授

著 書 「青年期—その生活と心理」(社会思想社)
「家族の心理」(金子書房)
「青年の心理①自己を育てる」(大日本図書)

にし　　ひら　　なお　　き
西　　平　　直　　喜

1926年 東京に生まる

1950年 東京文理科大学心理学科卒業

現 在 山梨大学教授

著 書 「青年分析」(大日本図書)
「青年の心理③友情・恋愛」(大日本図書)

心理学入門講座

〈新版〉⑤

現代青年の悩み

昭和43年4月10日 第1刷発行

昭和55年2月25日 第9刷発行

著 者 津 留 宏

西 平 直 喜

発行者 佐久間 裕 三

印刷者 内 山 明

発行所 大日本図書株式会社

東京都中央区銀座1の9の10

郵便番号 104

電 話 東京 (561) 8671~9

販 售 東京 9-219番

(金羊社印刷, 明泉堂製本)

© H. TSURU, N. NISHIHARA 1968

(落丁・乱丁本はおとりかえします)

はしがき

悩みは青年の特権である。子どもには苦しみはあっても、悩みはないといわれる。それはいれらが内面生活をもたないからである。苦しみは身体的自我の経験であるが、悩みは精神的自我の体験である。内面生活・精神生活が中核をなす青年期においては、悩みは根本的な問題となる。いかに生きべきかという問いは、その意味では古今を通じて青年の生の課題である。もし現代の青年が、いかに生きべきかという問いは、古くさいといって冷笑するならば、それは青年であることをみずから放棄するに等しい。

現代社会においては、しばしば適応が要求される。うまく適応できないのは、そのひとが悪のようにいわれる。しかし、適応は動物でもできるのである。よく適応しえた動物だけが、今日まで生きのこってきたことはたしかである。その意味で適応は、動物的次元における原理ではあるかもしれない。人間も動物であるかぎり、生きるためには適応が要求される。なんの悩みもなく、要領よく世渡りしていくひとは、まさにそのような動物である。

ひとはその環境に適応しなければ生きられないとともに、みずから環境にたちむかい、環境

をかえていくことができる。そのとき抵抗にぶつかり、緊張をしいられ、社会の矛盾に悩むのである。ひとはたんに生きるために適応するのではなく、本当に生きようとして悩むのである。本当に生きるためには、たとえ適応者として排斥されても、むしろ孤独をえらぶであろう。世俗的世界を失うかもしれないが、そのかわりに個性を獲得することができる。

適応とは、飼いなされた動物の生活であり、そこには自己を捨てることによってあがなわれた平和はあるかもしれないが、それは動物としての平和にすぎない。青年にとってそのような適応は堪えられない。まさに、悩むことは青年の特権なのである。

しかし、その悩みからなにが生まれてくるのか。もし、悩みが明日への力の源泉となり、自己を高める情熱とならないならば、そのような悩みは、たんなるセンチメンタリズムにすぎない。

依田 新

目次

はしがき	一
第一章 青年期は人生の危機	九
1 成人式の意味するもの	九
成人式の背後に（九） 原始社会の成人式（一〇） 今日の成人式（一二）	
子どもと成人のあいだ（一二） 二つの世界をつなぐもの（一五）	
2 現代社会への適応	一七
変貌する社会（一七） 技術革新にともなう人間疎外（一九） 進路決定の	
むずかしさ（二一） 結婚相手の選択（二三） 自由を生かしうる能力（二五）	
実存的不安（二九）	
3 青年の不適応徴候	三
非行の一般化（三） 生理的・情緒的な不安定さ（三） 青年期特有の	
問題行動（三） 現代青年の生活態度（三七）	

第二章 「悩み」の青年心理学的研究……………四二

1 「悩み」を研究するとは……………四二

悩みの分類（四三） 悩み相互の関係（四三） 原因の解明（四五） 悩みと人格形成（四七）

2 青年の感情と思考の特質……………四九

青年の感情の特質（五〇） T・A・Tによる青年研究（五一） 青年の感情三種（五二） 青年の思考（五六）

3 悩まない青年たち……………五九

なぜ悩まないのか（五九） 悩まない青年たちの社会的背景（六三）

第三章 青年の生活の場……………六七

1 生活の場のひろがり……………六七

青年の社会的位置づけ（六七） 青年は都市に多い（六九） 学校教育は二〇歳まで（七〇）

2 青年の職場……………七三

青年の多い職場（七三） 学歴による相違（七五） 問題は中卒の勤労青年（七七）

3 青年の学校……………七九

中学校の実態(一六)	中学校卒業後の青年(一七)	高等学校の現状(一八)
大学へすすむ者(一九)		

第四章 生活から生まれる悩み……………二六

1 学生の場合……………二六

a 中学生の悩み……………二六

肉体の変化にともなう悩み(二七) ばくぜんとした悩み(二八) 勉強に
関する悩み(二九) 学校生活についての悩み(三〇) 交友関係の悩み
(三一) 自分の将来についての悩み(三二) 家庭についての悩み(三三)
悩みの相談相手(三四)

b 高校生の悩み……………二七

悩み多きとき(二八) なにを悩むか(二九)

c 大学生の悩み……………二八

大学生の最大関心事(二九) その他の悩み(三〇)

2 勤労青年の場合……………二八

職場による分類(二九)

a 農村にはたらく青年の悩み……………二八

純農村の青年(二九) 副業農村の青年(三〇) 兼業農村の青年(三一)

b	大企業にはたらく青年の悩み	二三
	中学卒の青年(二三) 高校卒の青年(二四) 大学卒の青年(二六)	
c	中小企業にはたらく青年の悩み	二六
	職場での幻滅(二六) 失われる学業への意欲(二七) 劣等感とコンプレックス(二八)	
3	女子青年の場合	二三
	女子青年の進学率(二三) 関心は生活的・实际的(二三) 悩みは情緒的(二四)	
第五章	青年期のいろいろな悩み	三九
1	性に関する悩み	三九
	心とからだの分裂(三九) 性の悩みの人間化(四〇)	
2	親子関係の混乱と葛藤	四四
	内面的な根拠(四四) 両親の側の条件(四五)	
3	悩みとしての恋愛	五一
	内面の葛藤(五一) へ開いた恋愛Ⅴとへ閉じた恋愛Ⅴ(五一) 全体としてとらえること(五二) 人間形成の契機として(五二) 社会的・実存的な恋愛観(五三)	

第六章 悩みの底にあるもの……………一六三

1 悩みを内からつくり出すもの……………一六三

a 不安と劣等感……………一六三

ばくぜんとした不安(一六三) 不安の心理(一六三) 劣等感(一六七)

b 劣等感の克服法……………一六六

2 社会的な価値の葛藤……………一六七

(1) 家族制度的・封建的な性格因子——F(一六七) (2) 大衆社会状況的な性格因子——M(一七〇) (3) 社会主義指向的な性格因子——S(一七〇)

第七章 現代青年の生きがい……………一七三

1 生きがい感の喪失……………一七三

現代青年の無力感・疎外感(一七三) 生の不安(一七六)

2 へむなしさVの原因……………一七六

a 不良から非行へ……………一七六

人間性の荒廃(一七六) マス・コミへの逃避(一七八)

b 快適感と充実感の分裂……………一八二

快適感がみだされても(一八二) 未来への希望(一八三)

c 連帯感の欠如 一四

内からわき出すもの（二四） 自己を変革していく態度（二六）

3 むすび——悩みを問いなおす 二〇〇

悩みの質を高める（二〇〇）

参考書解説（二〇五）

用語・人名解説（二〇九）

索引

・装幀 戸田信孝

・さし絵 篠崎三朗

第一章 青年期は人生の危機

1 成人式の意味するもの

成人式の背後に

青年期は人生におけるひとつの危機である、という見方は、伝統的によい。この見方に対して、もし青年のおかれた社会の状況さえよければ、そんなことはない、青年は円滑に成人社会に適応できる、といって反対する学者もある。現在の日本で、毎年、一月一五日に各地で行なわれる成人式のはなやかで明るい光景をみると、青年期は、人生でむしろいちばん楽しいときで、とても危機などとは思えない、という感じをもつ人も多いだろう。

しかし、はなやかそうにみえるかれらにも、悩みがないわけではない。ましてこの式に出たくても出られなかった多くの青年たちには、もっと暗い反面もあるだろう。

現代社会においては、青年期がやはり人生の危機である、と思わせる事実はいくらでもある。たとえば青年期における非行の増大、自殺の増加などは、よく統計的にも云々されるところであるが、こうした極端な不適応行動の背後に、もともと数多い問題行動や悩みが、青年期に生じているにちがいない。悩みというのは、自我が、その環境となんらかの面でうまくいついていないとき生ずる内的な心の苦しみである。かつて青年期は「悩み多きとき」とか、「疾風怒濤の時期」とかいわれたように、こうした環境との不適応を心理的につよく体験するのは、この時期の特徴である。なぜなら、青年期は発達上、子どもらしさを脱して、成人社会への自分の適応体制を模索するときだからである。この体制を定立するのは、現代社会において、けっして容易なことではないのである。

原始社会の成人式

子どもの身体から成人の身体になる、この主として性的成熟を主徴とするいわゆる思春期発育は、比較的、急激にあらわれる。一一、二歳ころから身長・体重の著増が目立ち、やがて陰毛の発生や男子の精通（精液の分泌）、女子の初潮のような性的成熟の徴候がみられる。そして、三、四年のあいだに、子どもはそれぞれ成人の男あるいは女の身体になってしまう。こうした発育の事実は当然、むかしから注目されていたにちがいない。今日の原始民族にも、この時期を画するなんらかの成人式（Initiation Ceremony）のときものがみられる。紀元前のエジプト

人、ユダヤ人、ギリシア人にも成人式があつたという。こうした式によって、子どもがいよいよ成人になったことを社会的に認証したのである。わが国でも古くから、一三―一五歳のあいだに成人式に類する行事が行なわれた。しかし、結婚するまでは、まだ完全な成人とはみなされず、若衆組とか若者連中とかよばれた一種の教育機関に参加して、しばらく子どもとも成人ともつかない生活を送るのがふつうだった。このあいだにどんな教育をうけたか、ということは青年教育上、今日でも興味あることである。

多くの原始社会では、成人式がすむと、子どもは一足飛びに成人の仲間入りをする。成人に許される服装や髪型やその他、種々の特権が一度に与えられる。だから成人式は単なる儀式ではなく、本当に成人の仲間入りをさせてよいかどうか、の能力をためされるきびしい試練の行事となるのがふつうである。その試練の内容は、割礼、入墨、抜歯、むち打ち、傷跡をつける、断食等、主として肉体的な苦痛に耐える力をためすものが多い。また高所から飛び降りさせたり、密林をひとりで抜けさせたりというような勇氣をみるものもある。狩猟や闘争の能力をみるものもあるようである。

部落の長老たちの前で、こうした試練に耐ええた者のみが、成人として認められる。不適格の者は来年まわしにされる。それは子どもはもちろん、親にとつても恥ずかしいことだから、幼いときから成人式での試練をめざして、親はけっして子どもを甘やかさない。したがって成

人式は、それなりに教育目標としての意義をはたしていたのである。そしてその試練の内容が、成人の資格をみるものだったとすると、その社会が、成人にはどんな能力が必要であると考えていたかがわかれておもしろい。そして子どもの教育とは、結局、この能力を子どもにつけさせることだったことなどは、いまの文明国でも本質的にはかわりがないのではないか。

原始的な社会では、社会の構造も運営も比較的単純だから、その能力は今日の文化社会の成人に要求されるほど、高等で複雑なものではなく、主として肉体的、運動的な能力であったが、それなりに、やはりかなりきびしいものだったことがわかる。もともと女子には、家事、育児の能力のほかは、こうしたきびしい内容のものは入れていない。ただ初潮後は性のきびしい統制を、ある民族はしたようである。

今日の成人式

今日の成人式では、どんな試練が青年たちに課せられているだろうか。どうも今日は、ただ青年をおだてたり、喜ばしたりするような行事のみ多くて、試練らしいものはほとんどみられないようである。

それでは、今日の青年たちは、成人になるための試練をまったく受けていないか、というだけではない。原始社会のような一時的な試練ではないが、毎日の教育の中で、この試練をうけているのである。学校でしばしば行なわれる考査、きびしい入学試験、採用試験、

職場での登用試験などは、比較的是つきりした試練の機会ともいえよう。こうした試練をへて、子どもは一步一步、成人社会にはいつていくのである。社会が複雑だから、原始社会のように一度だけの試練で、一足飛びに成人として認められるというようなことはないが、その成長と能力に応じて、部分的に成人の特権が認められているのである。たとえば運転免許を例にとってみても、一六歳になったら単車を運転できるが、普通自動車はまだ運転できない。一八歳になったら普通自動車は運転できるが、お客をのせる二種運転は二一歳までできない、というがごときである。

わが国で成人式が行なわれる満二〇歳は、すでに児童福祉法や少年法の圏外にあり、選挙権その他いわゆる公民権といわれるものが与えられる年齢として、とくに重視される。しかし被選挙権は、二五歳または三〇歳になるまで与えられないという点などから、まだ完全な成人としては認められていない面もある。法律上はともかくとして、社会的にはやはり就職して生計をまかない、結婚して世帯をもつようにならないと、成人として十分に一人前としては認められないということになると、この時期は二〇歳よりさらに数年後になるのがふつうである。

だから今日の成人式は、成人になる端緒として、その成長を祝うとともにその自覚を促すためのものであつて、けつしてこれがすんだら、トタンに成人になったと思うようなウヌボレは許されない。それはあまりに原始民族に近い考え方である、とさえいえよう。

子どもと成人のあいだ

それではなぜ、原始社会では、たとえ肉体的にはきびしいものであれ、一度だけの成人式で、ただちに成人の仲間入りができるのか。それはひと口に成人の社会といっても、その構造も運営も、比較的単純で、あるひとつの条件さえみたせば、一三、四歳でも成人といっしよに十分やっていけたからである。採集経済の段階にある社会では、体力さえほぼ成人なみになれば、それで成人としてのほたらきを示すことができる。したがって、結婚して子どもをもつことも可能である。要するに、子どもと成人の世界が質的にそうへだたったものでないから、一定の成長に達した子は、容易に成人になれるのである。その極端な場合として、動物が成獣に達する場合をみれば、このことはよく了解できよう。いわば生物的な成熟が、同時に成人の条件をみたすのである。

ところが文明社会では、子どもと成人の世界は質的に非常にへだたってくる。そもそも文化がすすむということ自体、成人の世界にかかわっていることで、子どもの世界は、いくら文化がすすんでも、本質的にはそうかわるものではない。子どもは年少なほど、より文化以前の状態にあり、環境がいくら文化的になっても、その発達上の制約のゆえに、そうやたらに文化的にすすむものではない。子どもはこの社会でも、またいつの時代でも似たようなものであることは、赤ん坊がもつともよくこれを示している。